

白雲片片

第二十七回

梅の花と梅花紋

現在の宗門において梅の花といいますが、と嗣法の証となる三物の絹織物きぬおりものにその図柄が使われておりますし、梅花流詠讃歌でも使用されておりますので普段から目にする機会があるわけでございます。ですが、この図柄の由来は何であろうかと疑問に思いましたので、甚だ簡単にはございませうが調べることができました。

まずは正法眼蔵『嗣書』に、若き日の道元禪師が宋の国を行脚げんし中、元奘和尚げんしから梅の花の図柄が入った嗣書を見せてもらった話がございますので原文のまま一部分を書き出します。

正法眼蔵『嗣書』

—中略—のちに宝慶ほうきやうのころ、道元だいえん、台山たいざん・鴈山がんざん等に雲遊するついでに、

へいでん 平田の万年寺にいたる。ときの住持は福州の元奘げんし和尚なり。そうかん 宗鑑長老退院たいいんののち、元奘げんし和尚補す、叢席そうせきを一興せり。人事のついでに、むかしよりの仏祖の家風往来せしむるに、大偽だいい仰山ぎやうざんの令嗣りやうし話を挙するに、長老わいはく、曾看かつてわがこりのししよをみるやいなや我箇裏嗣書也否。道元わいはく、いかにしてかみることえん。長老わすなはちみづからたちて、嗣書をささげていはく、這箇しゃこはたとひ親人いしんじんなりといへども、たとひ侍僧わのとしをへたるといへども、これをみせしめず。これすなはち仏祖の法訓なり。しかあれども、元奘げんしひごろ出城し、見知府けんちふのために在城のとき、一夢だいはいを感ずるにいはく、大梅山だいまいざん法常ほうじやう禪師とおぼしき高僧じっしんありて、梅花いっし一枝をさしあげていはく、もしすでに船舷せんげんをこゆる実人じつじんあらんには、花ををしむことなかれといひて、梅花わをわれにあたふ。元奘げんしおぼえずして夢中に吟じていはく、未跨いまだせんげんをまたがざるに、よしさんじゅうぼうをあたえんと船舷せんげん好与こうよ三十棒さんじゅうぼう。しかあるに、不經いつかをへず五日、與老兄ろうひんとそうけんす相見わ。いはんや老兄ろうひんすでに船舷せんげん跨またがりきたる来、この嗣書せんげんまた梅花の綾あやにかけり。大梅だいまいのおしふるところならん。夢草むそうと符合するのゆゑえにとりいだしなり。老兄ろうひんもしわれに嗣法しほふせんともとむや。たとひ

もとむとも、おしむべきにあらず。道元、信感おくところなし。嗣書を請すべしといへども、ただ焼香礼拝して、恭敬供養するのみなり。ときに焼香侍者法寧ほうねいといふあり、はじめて嗣書をみるといひき。道元ひそかに思惟しゆいしき、この一段の事、まことに仏祖の冥資みやうしにあらざれば見聞けんぶんなほかたし。—中略—なんのさいはいありてか数番これをみる。感涙かんだい露袖ろうすく。ときに維摩室ゆいましつ・大舍堂だいしゃどう等に、閑闕げんけつ無人むじんなり。この嗣書は、落地梅綾らくちばいりようのしろきにかけり。長九寸ながさきゆうすん余あまり、闊一尋余ひろさひとひろあまりなり。軸子じくすは黄玉こうぎよくなり。表紙は錦なり。道元、台山たいさんより天童てんどうにかへる路程えに、大梅山護聖寺たいばいざんごせいじの旦過たんがに宿するに、大梅祖師たいばいそしきたり、開花けいかせる一枝の梅花ばいげをさづくる靈夢れいむを感ず。祖鑑そかんもとも仰憑ぎやうひやうするものなり。その一枝花の縦横じつじやうは、一尺余いっしやくあまりなり。梅花ばいげあに優曇華うどんげにあらざらんや。夢中と覚中と、おなじく真実なるべし。道元在宋のあひだ、帰国よりのち、いまだ人にかたらず。—以下略—

要約しますと、中国南宋時代の宝慶年間（西暦一二二五—一二二七年）の頃、道元禪師が現在の中国浙江省せつこうしやうにある万年寺（現存）

を訪ねた際、その時の住職であった元熏和尚げんしんから本人の嗣書あやおりものをみせてもらう機会があり、その嗣書は梅の花の図柄が入った綾織物あやおりものに書いてありました。なぜ本来なら他見が許されない嗣書を初対面の道元禪師に見せようと思われたのかというと、道元禪師が万年寺を訪れる直前、元熏和尚の夢の中に大梅法常禪師（唐時代の方ばで馬祖道一ばそどういつ禪師の法嗣はつす）と思われる高僧が現れ、一枝の梅の花を手に持ち、「もし遠く海を渡って来た真の求道者がいたならば、花を与えることを惜しんではならない」と元熏和尚に告げ、手にしていた梅の花を渡されたそうです。道元禪師が訪ねてきたのはそのわずか五日後であり、夢の中で大梅法常禪師から手渡された梅の花と、自分の所持している嗣書の図柄との印象が一致していました。元熏和尚は大梅法常禪師の「花を与える」という言葉を「嗣法を許す」ことだと解釈され、道元禪師に自分から嗣法をすよう勧めました。願ってもいない話に道元禪師は感激されたようですが、この時は焼香礼拝するに留めて辞退されています。なお、道元禪師はこの時点ではまだ如浄禪師に出会われておりませ

ん。

その後、如浄禪師が天童山景德寺の住持となった噂を聞いた道元禪師が天童山に戻る途中（道元禪師は天童山へ如浄禪師入山前と入山後の二回上がられておりますので二回目の時）、大梅山護聖寺（大梅法常禪師開山・現存）の且過寮に宿泊した際、夢の中に大梅法常禪師が現れて、花の咲いた縦横一尺ほどの一枝の梅を渡されたそうです。先立っての元薫和尚とのこともあり、その夢がとても神秘的に感じられたようで、渡された梅の花は法華経などの経典に出てくる、三千年に一度花が咲くといわれる伝説上の植物「優曇華」であるとおっしゃっています。仏教では優曇華は非常に珍しいことの比喻や瑞兆の象徴として扱われることがありますが。道元禪師はこの神秘的な体験を正法眼蔵『嗣書』に記すまで一度も人に語ったことがない、と書き残しておられます。

次に正法眼蔵『梅花』を参照しましたところ、道元禪師自身が如浄禪師から直接聞かれた説法をいくつか挙げて詳細に解説しておられます。この巻では如浄禪師が特別に梅の樹や花を好んでお

られたことが分かりますが、植物としての見た目や香りを好まれただけではなく、梅の樹や花から宇宙真理を感じ取り、その様子や景色を仏法と捉え、上堂説法の際に度々採り上げておられたようです。また紙面の都合上詳しくは書けませんが、道元禪師は達磨大師の「一華五葉を開く」という教えを梅の花のことであるとおっしゃっておられます。ここで正法眼蔵『梅花』にある如浄禪師の上堂語を一つ紹介致します。

一言相契（一言相契えば）

万古不移（万古移らず）

柳眼発新条（柳眼は新条に発し）

梅花満旧枝（梅花は旧枝に満つ）

古来より禪僧は自然や植物を機縁にして悟ったという逸話が多くございますし、また自然や植物を仏法と重ねて偈頌に表すことが多々あり、梅の樹や花もそのうちの一つであったわけですが、如浄禪師や道元禪師ほど梅の樹や花を特別に取り上げておられる祖師は他に見つけることができませんでしたので、今の

ところ私は宗門と梅の花の関係についてはこのあたりに源流があるのではないかと思います。

大本山永平寺には明治三十三年に国の重要文化財に指定された「高祖嗣書」と呼ばれる、道元禪師が如浄禪師から嗣法した際の嗣書が所蔵されています。これはその秘匿性から、文化財に指定される以前もそれ以降もほとんど他見を許されることがない物らしく、この嗣書に関する論文もわずしか見つけられませんでした。直接見る機会があった研究者によりますと、この嗣書は梅花の紋様を透かし織りした絹本地であるらしく、私が所持している本にも写真が掲載されているのですが、画像が粗く遠いため梅花紋を確認することはできませんでした。宗門の重宝ですから科学的な検証が行われていないようですので詳細は分かりませんが、釈迦牟尼^{ほだ}勃陀^{ぼち}地から始まる仏祖号は道元禪師の真筆、「新道元」と下段の文字は如浄禪師の真筆、朱線は如浄禪師と道元禪師の血を混ぜ合わせて書いてあることとなります（大鑑慧能禪師―青原行思禪師下の法系だけは、嗣書の朱線は師弟の血を混ぜ合わせて

書くのが伝統であったそうです）。

私が直接見ることでできる嗣書で最も古いものは大正十一年の十二月八日、私の祖翁（祖父）が二十歳の時に嗣法した際のもので、これには○の周囲に○を五つ均等に並べた一・七センチほどの小さな梅花の図柄（星梅鉢か）が絹織物の全体に散りばめられています。私自身の嗣書の図柄は二センチほどで、現在、梅花流詠讃歌で使用されているものによく似ております。

以上、簡単に調べて参りましたが、梅の花は古来より嗣書の図柄に使用された嗣法の象徴であり、命懸けで弁道をされた祖師方にとって、梅は日常で目にするありふれた樹であり、春を告げる花であり、また同時に珍しい優曇華ともいえる花でした。そして道元禪師が伝えられた如浄禪師の教えからは梅の樹や花が見せる時々の移り変わりは宇宙真理そのものであり、また教化のため宇宙真理を説くのに適した植物であったことが分かります。

参考文献／大久保道舟編「道元禪師全集上巻」、水野弥穂子校注「正法眼蔵（二）（三）」、他